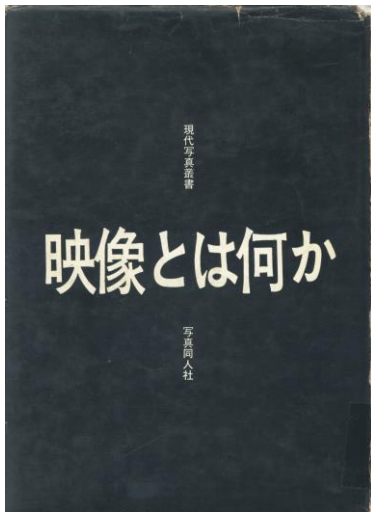


日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

材木商を営む家に生まれた吉村伸哉^{よしむらのぶや}（1933-1977）は、1957年に早稲田大学第一文学部哲学科を卒業し、フリーの写真評論家として活動を開始しました。大学に進む前の旧制東京都立第七中学校（現：都立隅田川高校）では、写真家の細江英公と同級生で、共に写真部で活動していました。細江は自叙伝『なんでもやってみよう・私の写真史』（窓社・2005年）にて、自らがソルントンの木製大型一眼レフカメラを使用していたのに刺激されて、吉村も父親のグラフィックスを使いはじめたと回想しています。



『映像とは何か』

大学でも写真部に所属して山岳写真を撮影し、1956～57年の『アサヒカメラ』には、風景写真懸賞と月例の入選作品が掲載されています。

写真評論家となった当初は、『日本カメラ』、『カメラ毎日』で写真展月評や口絵解説、撮影技法記事などを担当しました。後者では写真家へのインタビュー記事「ひと・ひと・人」を1964年1月号から1年間、1965年1月号からの1年間は、写真グループへの撮影指導連載「共同制作研究 指導」を担当しています。

1960年代中頃からは出版社「写真同人社」の活動に加わり、『旬刊フォトコンテスト』（1966年4月創刊）の編集に携わったほか、同社から『写真芸術事典』（1965年）、『映像とは何か』（1966年）を共著で発行しています。しかし、同社の破綻を受けて1967年5月に自ら「写真評論社」を設立し、『旬刊フォトコンテスト』を復刊します。同誌は1968年1月号から『月刊フォトコンテスト』となり、1973年10月号まで発行されました。さらに1969年5月には『季刊写真映像』を創刊し、1971年12月の10号までプロデューサーとして携わりました。写真評論社での著書には『現代写真の名作研究』（1970年）があります。



『季刊写真映像』創刊号

写真同人社、写真評論社時代の活動で特筆されるものとして、東松照明への傾倒が挙げられます。東松の写真集『〈11時02分〉NAGASAKI』は1966年に写真同人社から発行されましたが、1968年7月に東松自身が設立した「写研」から再発行されています。この経緯について東松は『日本の写真家30 東松照明』（岩波書店・1999年）内の対談にて、「写真同人社からさらに3冊を加えた選集を出そうと計画していましたが、倒産してしまいました。債権者会議に出たところ、読者からの予約金が前納されていることを知って、その読者にお返しするつもりで作ったのが『日本』です」と語っています。また、この選集候補の1冊であったのが『I am a king』で、1972年に写真評論社から発行されました。

その後は家業に重点を置きながら、写真評論活動を続けました。亡くなる直前の寄稿に『日本カメラ』1977年11月号の「時評・私評 教え魔と教わり魔」があります。